

6月中旬。真剣な眼差しで梅を収穫するゆあさ農園園主の湯浅直樹さん。

湯浅さんの 暮らしと梅干し

群馬県・榛名で4代にわたり梅を育て、梅干しを作っているゆあさ農園は、農産物と加工食品のどちらにも有機JAS認証を取得している、全国でも数少ない農園。自給自足の暮らしを实践する園主の湯浅さんを訪ねました。



土作りは畑に 梅作りは樹に

ゆあさ農園(群馬県高崎市)に到着すると、桃のような甘い香りが迎えてくれました。白加賀という品種で、収穫後5日間追熟させたもの。収穫直後の青い梅と違って、黄色く熟した梅たちはこの爽やかな香りを周囲に漂わせます。

「この匂いが漬けてくれたっていうサインなの。梅干しにするのにいちばんいい状態」

説明するのは園主の湯浅直樹さん。ゆあさ農園では梅を有機栽培し、昔ながらのシンプルなお梅干しを作り続けています。

梅干しにするための「漬け込み」の作業がこの日の午後待っています。まずは朝の収穫作業。大地を守る会に出荷する生梅を収穫します。ぶら下げたカゴに、次々と梅の実を入れていくのは、湯浅さんご夫婦と、昨年から手伝っている息子の大树さん。

この日200キロほど収穫する

動力は 湯浅流

「南高」は、10年前に植え替えたもの。脚立を使わなくても作業ができるよう、2メートルほどの樹高になるように剪定しています。脚立を使う作業の場合、1日に収穫できるのは100キロほど。使わなければその3倍は取れるのだそう。「効率を最大化し、安全性も考えた結果」だと湯浅さんは話します。

栽培に関しても、なるべく自然な形で土や植物の力を引き出すのが湯浅さんのスタイル。梅の枝を炭化したものを木の根元にまいていますが、肥料など他に何か与えることはありません。

草を刈るときには少し残しておき、微生物のすみかを作ります。「土作りは畑に任せて、梅の樹作りは梅の樹に任せています。梅は粗放作物と言われ、やってもやらなくても違いが出にくい。それならやらないうちがいい」

慣行栽培の場合、農薬の使用は10回ほどありますが、湯浅さんの場合は0回です。湯浅家は代々梅農家をしてきて、湯浅さんが4代目。家族が病気になる「誤った食べ物を食

べれば病気になる」と考えたことをきっかけに、少しずつ農薬を減らしてきました。

当初はそのやり方を教えてくれる人がいざいざでしたが、韓国の自然農業の先人、趙漢珪(チョウハンギョ)先生に学ぶ機会があり、来日するたびに北海道や九州まで足を運んだのだと言います。大地を守る会との出会いもそうした集まりの中で生まれ、現在まで続いています。

家族で決めた 経営協定

収穫が終わると次は、傷のついたものを取り除き、サイズ別に分ける

「選果」の作業です。傷のある梅は、かつては廃棄処分していましたが、今は梅肉取り機という機械を使って果肉と種に分け、果肉を練り梅にしています。練り梅は、梅酢とあわせて液状にした「かける梅干し」、唐辛子とあわせた「かける梅胡椒」など様々な加工品にも展開しています。どうしても虫がついたり傷がついたりしやすい有機農業ですが、

「だからこそ加工と相性がいい」と湯浅さん。「梅肉取り機を導入してからは、傷のある梅も怖くなくなりました。宝物です」さて、選果を終えるとお昼休みです。

「選果が終わったのが12時少し過ぎていたから、じゃあ13時15分まで」そう言い渡した湯浅さんに、「家族3人だけなのに、随分きつちりしているんですね」と聞くと、「家族経営協定で昼休みは1時間と決めているから」という答えが返って来ました。

この協定は、それぞれの役割、責任、就業条件、報酬などについて家族間で話し合って取り決め、文書化したもの。高崎市の農業委員会が主導して協定の作成を推進して来ました。農業後継者の確保や働きやすい環境の構築などを目指すもので、農業に従事している各家族が、それぞれ話し合っ必要を取り決めるのだそう。

ゆあさ農園では、安全性と働きやすさを維持する工夫が、あちこちに見られます。漬け込む梅に乗せる重石は、以前は20キロのものを使用していましたが、ある時すべて処分し、女性でも持つことができる15キロのものに買い換えたのだそう。

いよいよ午後は梅干しの漬け込みの作業です。大きなコンテナに、梅を320キロと塩を48キロ。しそやはちみつなどを入れず、梅と塩のみ。塩は海水から伝統製法で作った「海の精」を使います。

3日ほどで梅酢が上がって来て、1ヶ月ほどしたら「三日三晩の土用干し」と言われる天日干しをし、樽で保存。これ以上ないシンプルな材料と、シンプルな製法です。



1 湯浅さんご夫婦と息子の大树さん(中央)。数年不作が続いていたうえに昨年は雹の被害に見舞われ(詳細は裏面参照)、梅がほぼ全滅してしまったが、「今年は(例年より)少しいいね」とホッとした笑顔を見せた。
2 収穫した「南高」。農薬の使用が一般的になった時代に開発された品種のため、皮は柔らかいが病害虫に弱いという。ゆあさ農園では、傷がついたものは練り梅にして加工品にする。
3 事務所(中央)と自宅(左奥)、加工場(右奥)の屋根にソーラー発電機。電力の自給率は1000%を超える。右手前は、梅を天日干しにするガラスハウス。費用はかかるがビニールを使わないことを選択した。
4 収穫の合間に、小梅の湯浅けを食べながらひと休み。
5 剪定した梅の枝をボイラーで燃やし、給湯や暖房を賄う。



県外の会社で営業や人事の仕事をしてきた息子の大樹さん。昨年からはダブルワークで農園の仕事もしている。農家の仕事は性に合っていて「心理的なストレスは減りました」。農家を継ぐという周囲から「大変ですね」と言われるのが悔しいという。「有機は付加価値になるし、継ぐに値するものをやっている」という自負がある。「だけど、父と同じことだけやっても先が見えない。新しいことをやって差別化をはかっていきたい」と意欲を見せる5代目に期待。

自給を極めた 農家の夢

湯浅さんの想いがたくさん詰まった梅の栽培と梅干し作りですが、「湯浅流」は栽培と加工だけにとどまりません。一連の作業のベースとなっているエネルギーや水の「自給自足」。それは、ゆあさ農園の農業であり、湯浅直樹という一人の人間の選んだ生き方でもあります。

「大人になったら自分で使う電気を自分で作る」のが夢だったという湯浅さん。

「電気って、動く力にもなるし、明るさにもなる、ラジオもテレビも動かして、何にでも形が変わる」

不思議な電気の方に子ども頃から魅かれ、就職は電機メーカーに。「農業は嫌だ」と思っていました。地域の青年団の活動にのめり込み、社会問題に取り組みようになると、考え方が変わりました。食料やエネルギーの問題に関心が向き学ぼうと、農業の大切さに気づいたのです。

青年団の活動で海外に視察に行ったり、阪神大震災の被災地でライフラインがストップする様子を見たりする中で「日本は食料もエネルギーも海外に依存している。大事なものは自分で持たなきゃいけない」と考えるようになりました。

地下80メートルの井戸を掘り、さらに自宅や加工場の屋根にソーラーパネルを設置しました。自家発電した電気を使うように、チェーンソーや草刈機などの農機具も電気化。フォークリフトは、なんと重機メーカーと共同で独自開発した「ソーラーリフト」です。

自給自足の考え方とその実践は、農業にも暮らしにも一貫しています。木と漆喰の自然素材の自宅は、構想



15年かけた自給自足の家。屋根に太陽熱温水器を設置し、さらに剪定した梅の枝を燃やすポイラーで給湯や暖房を賄っています。

湯浅さんの実践する「環境保全型農業」を学ぼうと、今では国内外から見学に訪れる人が絶えません。自分はどう生きるのか。理想はあっても実践するのは難しい、など何かにつけて言い訳ばかりになりがちですが、湯浅さんの暮らしの中に言い訳はありません。

湯浅さんの、しょっぱくて酸っぱい本物の梅干しが、「できることから始めよう」と背筋をピンと伸ばしてくれました。

完成した梅干しが樽の中でじっと出荷を待っている。塩分補給に体が喜ぶ味わい。

梅が黄色くなって香りがしてきたら漬けどき。選び抜いた天然塩とあわせて重石をのせる。

湯浅さんおすすめレシビの混ぜご飯。玄米・雑穀に練り梅とツナを混ぜたら、大葉やミョウガなどの薬味をのせて。梅の枝を削って作った手作り箸で「いただきます！」。



塩のみで漬けた昔ながらの味わい
ゆあさ農園の
有機白梅干し(海の精使用)

2779
120g
998円(税込1,078円)



傷のついた梅は料理の幅が広がる練り梅に
有機練り梅
(大地のもったいナイ電害梅使用)

2759
120g
998円(税込1,078円)

④ゆあさ農園(群馬県高崎市)
※同時配布の「カタログ大地を守る」とお買い物サイト135号も合わせてご覧ください。

ゆあさ農園、今年は無事に梅を収穫「大地を守る第一次産業支援基金」

15分間の雹で1年分の梅がほぼ全滅

今年も豪雨や雹の発生・被害がニュースになっていますが、予測しきれない天候により、作物や農家は影響を受けます。2022年6月2日にも、観測史上最大と言われる雹が降り、生梅・梅干しの生産者・ゆあさ農園(群馬県高崎市)は大きな被害を受けました。「たった15分間で、樹になっていた梅がほぼ全滅してしまいました」とは園主の湯浅直

樹さん。大半の梅は地面に落ち、なんとか樹に残った梅も傷だらけという状況でした。そのため、昨年は梅のお届けを断念せざるを得ませんでした。大地を守る会の会員の皆さんからゆあさ農園へ、たくさんの励ましのメッセージが寄せられ、また、「大地を守る第一次産業支援基金」の支援も実施されました。

私たちの食、生産者を守るために

大地を守る第一次産業支援基金は、台風や水害、干ばつといった自然災害、震災への緊急支援・復興支援、第一次産業を守り育てるための支援などを行うものです。東日本大震災の震災復興支援を目的に設立した「大地を守る震災復興支援基金」が前身で、自然を相手にする第一次産業を守り育てる必要性を改めて強く感じ、「大地を守

る第一次産業支援基金」として継続、支援を行っています。「支援していただき、本当に有難かったです。今年は無事に梅が収穫できました」(湯浅さん)。たわわに実る梅は決して当たり前ではなく、有難き自然の恵みです。私たちの食、それを作る生産者を守るため、大地を守る第一次産業支援基金へのご協力をお願いいたします。

- 1 昨年6月の雹による被害の様子。このように梅は腐ったり大きな傷がついたりしました。
- 2 今年の収穫を行う息子の大樹さん。昨年からダブルワークで農園の仕事も始めました。
- 3 樹にはたくさんの梅が実っていました。明るい緑色がすがすがしい。



ご協力よろしく
お願いいたします

自然災害や震災など
国内の生産者・産地を支援
大地を守る未来募金

4800 1口 500円

※「大地を守る第一次産業支援基金」への募金です。

未だに水が残るパキスタンの洪水被災地を支援「DAFD AF基金」

緊急食糧支援から長期的家屋再建支援へ

2022年8月の豪雨で国土の3分の1が水没したパキスタンの被災地復興活動は、未だ続いています。NPO法人JFSA(千葉県千葉市)は古着回収を通じて、カラチにあるスラムの学校「アルカイル・アカデミー」の運営支援を続けてきましたが、同アカデミーは昨年8月から現地のネットワークを生かし、今回の洪水被災地の復興活動を行っ

てきました。先生と生徒が参加して始まった緊急支援活動は、現在、家屋再建支援として継続しています。支援先はカラチ市北方の町ダドゥ近郊のプント村。150家族が暮らすこの村には、家の再建が必要な世帯が125軒あります。2023年5月までに30軒の家屋が再建され、最も厳しい状況にあった家族から入居が始まっています。

生徒たちから見た支援

アルカイル・アカデミーに通う生徒たちはスラムに住んでいるため、決して裕福な暮らしをしていないわけではありませんが、被災地を訪問し、支援を体験してもらうことは社会勉強として大切だと、同アカデミーでは考えています。現地を訪問した生徒アーマッド君(9年生)は次のような感想を述べています。「村に着いた時にショック

を受けました。すべてが破壊されていました。村人たちは被害を受けた家屋から使えるものを探していました。私たちは毛布や食糧を配りました。彼らの喜ぶ様子は言葉では言い表せないほどでした。また助けに行きたいです」。DAFD AF基金の洪水被災者支援は9月末まで継続予定です。ぜひご協力をお願いいたします。



ご協力よろしく
お願いいたします

災害や有機農業など
海外の生産者・産地を支援
DAFD AF基金

4801 1口 500円

※「DAFD AF基金」への募金です。



- 1 ばらばらになったレンガを積み上げ、布を屋根にした仮住まいでの暮らしが続きます。
- 2 代々耕してきた畑は1年近くたっても水没したまま。除水作業はなかなか進みません。
- 3 アルカイル・アカデミーのスタッフが村の人たちに聞き取りを行い、どのように家屋を再建するか決めていきます。
- 4 再建された家の前で。困窮の度合いが高い住民の家から再建が進められています。

『NEWS大地を守る』はWEBでもご覧いただけます。イベントの詳細・お申込みもWEBからどうぞ。

大地を守る会

検索



●「NEWS大地を守る」に掲載している取り組みは、主に大地を守る会の宅配サービスの年会費・利用料で運営されています。

お問い合わせ

オイシックス・ラ・大地 ソーシャルコミュニケーション部
TEL 050-5306-8513
E-mail ord_social@oisixradaichi.co.jp

注意事項

当社は、大地を守る会のイベント及び大地を守る会が告知する他団体のイベントにお申込みいただく際、ご記入いただく個人情報を、お申込み内容に関する確認、参加者への連絡、抽選、抽選結果連絡、お問合せに対する回答、非常時に関する対応、イベントの質向上管理のために利用させていただきます。なお当社は、イベント等を旅行者に業務委託する場合があります。この場合、個

人情報を開示することがあります。業務委託にあたっては、個人情報保護に関する契約を締結し、業務委託先が契約を遵守するよう必要かつ適切な管理及び監督を行います。上記に同意の上お申込みください。個人情報の取扱いに関するその他の条件については、当社ウェブサイトの個人情報保護方針をご確認ください。
<https://takuai.daichi-m.co.jp/information/8>

※イベントについてWEBへのアクセスが不可能な場合は、ソーシャルコミュニケーション部へお電話いただきご確認・お申込みください。



大地を守る会
DAICHI wo MAMORU KAI

発行

オイシックス・ラ・大地株式会社
東京都品川区大崎1-11-2 ゲートシティ大崎イーストタワー5階
TEL 050-5306-8513